

さきたま古墳に隣接する水辺の公園増設計画 / 様々な表情を見せる場所

八代研究室

00412040 今井 大祐

1. はじめに

現在、地球温暖化という深刻な問題を抱えている中、熊谷・行田地区は日本でも毎年夏季に最高気温を観測する猛暑地帯である。その行田市郊外にあるさきたま古墳公園周辺には、今でも多くの水田が残っている。そこで本計画は、さきたま古墳公園と武蔵水路の間の敷地にさきたま古墳公園の増設を提案する。

2. 敷地

図1に示すように、利根川と荒川を結ぶ武蔵水路沿いには、JR高崎線北鴻巣駅からさきたま古墳公園までさきたま緑道が続いている。

図2に示すようにさきたま古墳には9基の古墳が現存している。築造年代から、ほぼ北から南に向かって古墳が出来ていることがわかる。

また敷地中央を北と南に分ける様に行田・蓮田線が通っている。

3. 順路説明

本計画では、3つのテーマを設けた。

テーマ 1) 武蔵水路を利用して水量を季節ごとに調節しつつ公園内に水を引き込み、水の気化熱によって公園内の気温を下げる。図3に示すように水辺の移り変わりを三段階に設定した。

テーマ 2) 夏季だけでなく冬季の北西風なども考慮した設計を心掛ける。

テーマ 3) 周囲の水田は、行田市らしい景観としてなるべくそのまま残す。

図3に示すように、①～③の順路を設定し、全体を時計回りに歩かせ、⑨から古墳を古い順に見せるようにした。図4はそれぞれの場所の模型写真やスケッチを示したものである。南側に移設した駐車場やさきたま緑道からアプローチし、①では公園への導入部に高い壁を造ることにより、公園内を外から

直接見えないようにした。②では、ある位置から見ると近くの景色と遠くの景色が重なって見えるようにし、近くと遠くの景色に繋がりを持たせ、全体の統一感を意識した。③では④の円墳山の手前にステージを設け、山を借景にステージを利用することも出来、逆に山を客席として利用することも可能である。また、秋・冬には円墳山の南東は水が引くので、そのスペースをステージとして利用すれば北西風を避けることが出来る。

行田・蓮田線を挟んで北側の敷地に行くと、⑤の芝生の広場がある。その広場を抜けるとスロープで水の中に続いていき、⑥の水の中を見せながら歩かせる通路を通る。スロープにすることによって、障害者でも問題なく通ることが可能である。季節によって水量は異なるが、春・夏・秋には水面の様子や水中の様子を見ることが出来る。水中の通路を抜けると⑦に示すように、さっきまで水の中にいたはずがいつの間にか森の中に出てくる不思議な感覚に陥る仕組みにした。⑧の森の中のアスレチックでは、先に進んでみないと何があるかわからないという利用者がわくわくするようなプランになっている。北に森を造ったため、冬季の北西風を遮る役割も担っている。その森を抜けるとさきたま古墳公園へ続いていく。

4. まとめ

本計画では地球温暖化を考慮し、水・古墳・公園の融合によって記録的暑さが続く夏季に、少しでも涼しく過ごすことが出来る施設を提案し、行田市の活性化に繋がればと考えた。浮き城のまち行田というフレーズにも当てはまるプランが出来たと思う。

【参考文献】

梶野 国男『古代の土木設計』六興出版 1983

ダニ・カガヅ『隠された庭への道』札幌芸術の森野外美術館 1999

高橋 一夫『鉄剣銘一五文字のなぞに迫る』新泉社 2005

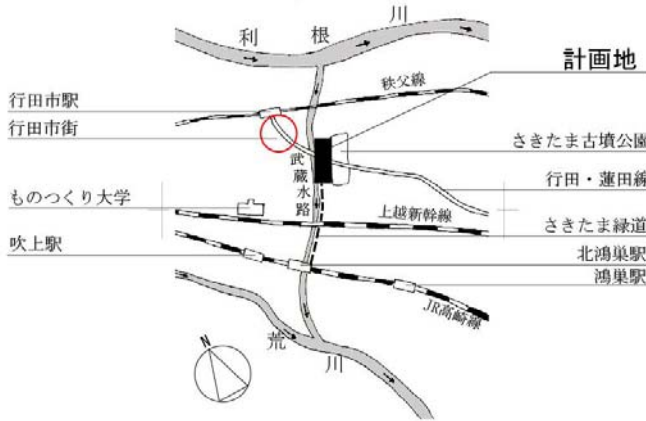


図1 敷地周辺概念図

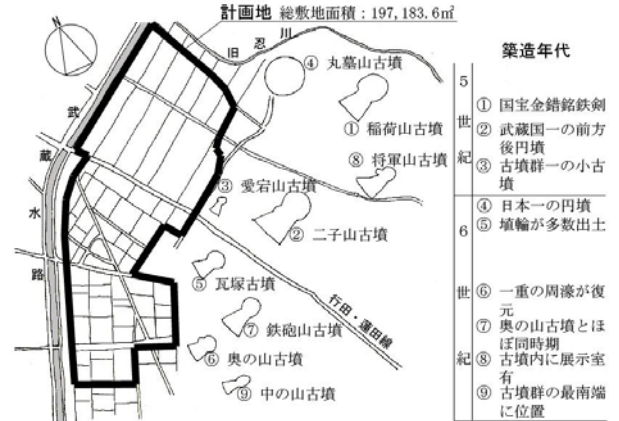


図2 計画地及びさきたま古墳群の築造年代

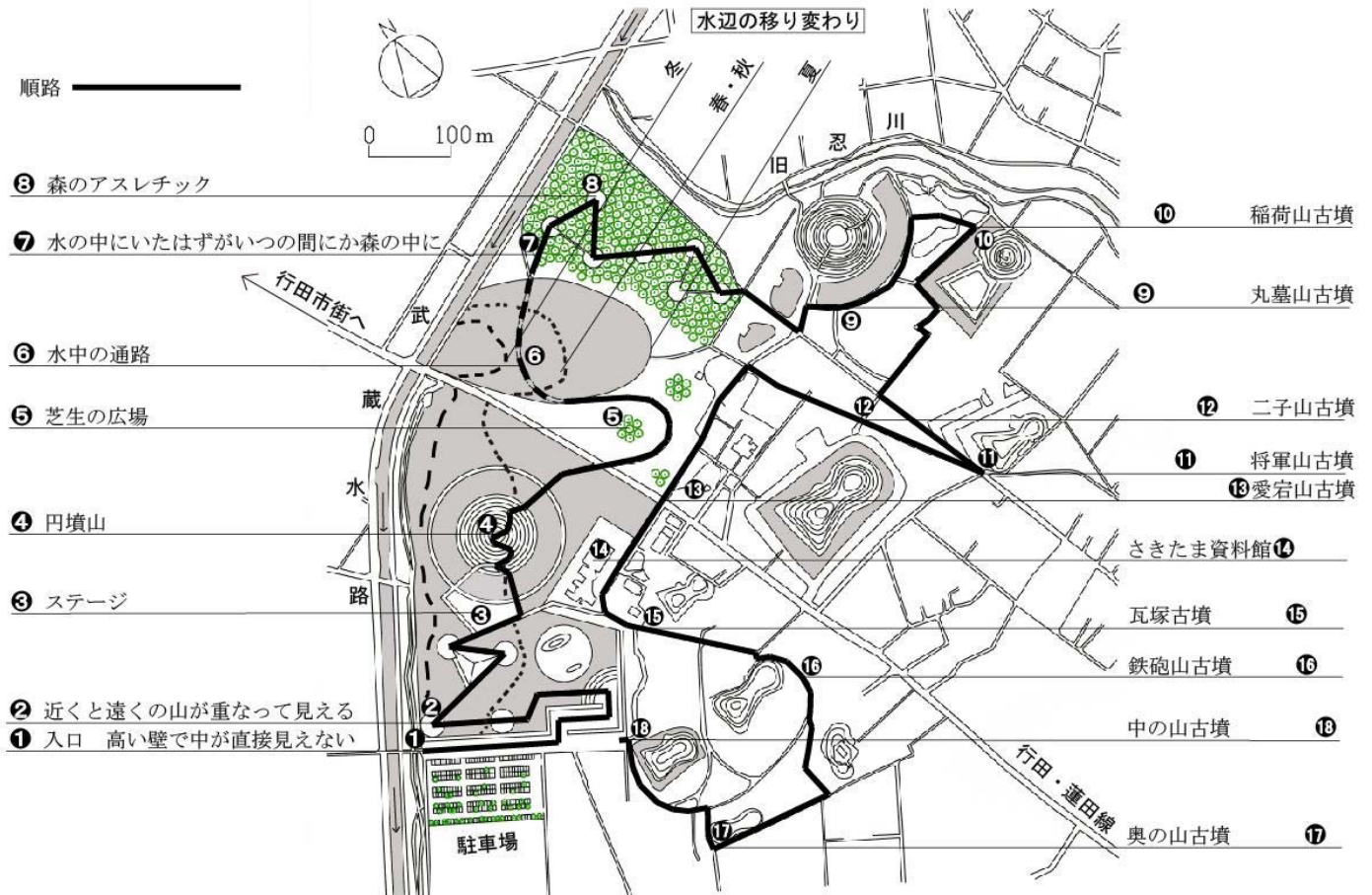


図3 敷地図及び順路説明図

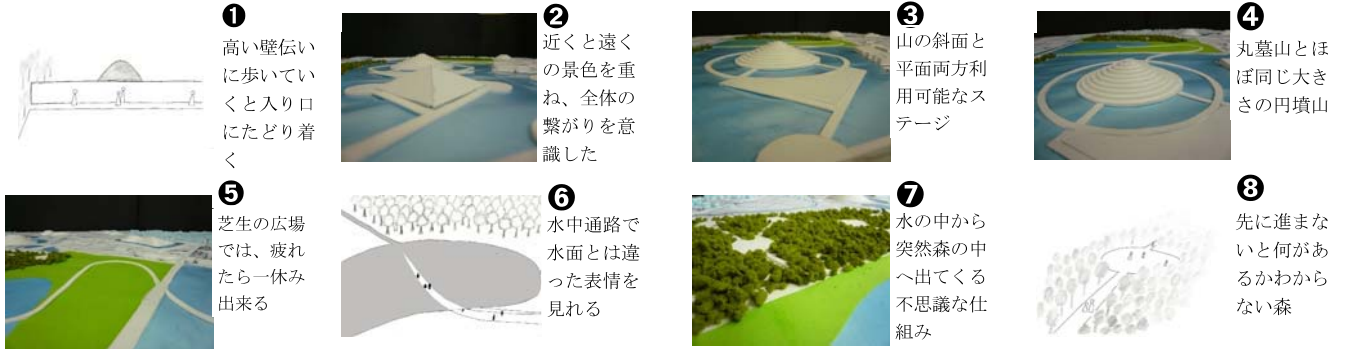


図4 順路説明